

スラヴ学研究者論文用文献引用マクロ

citare.sty Ver. 1.2

isao yasuda, isao@yasuda.homeip.net

2007 年 2 月 25 日 (訂2)

1 はじめに

citare.sty は主にスラヴ文献学論文において文献引用を支援するためのスタイルパッケージである。

標準 L^AT_EX では `\cite` 命令で文献参照を指示すると、文献番号や著者キーの簡略形式で表示される。これは簡潔かつ明快であり、最近では理科，文科を問わず文献参照形式として必要充分であると考えられる。しかしながら、人文系論文や学術書においては伝統的に引用文献表示を書名全体として、さらに注において行うものが多い。この様式を踏まえて論文を書かなければならないとき、標準 L^AT_EX の文献参照機能では対応できない。

citare.sty は標準 L^AT_EX の `\cite`, `\bibitem` を再定義することにより、従来に近いインタフェースで文科系論文における伝統的な文献参照形式をサポートする試みである。もともとスラヴ文献学のマナーに則って論文を書くために作者は本マクロを作成した。本来論文は投稿規定に準じて行うべきものであってみれば、汎用性を主張するものではない。とはいえ、文献参照を文献名で引く方式である点で、文学，言語学，歴史学などの文科系論文一般にもある程度適用できると思う。

本マクロ・パッケージは無保証である。問題点等のご指摘は題記アドレスまでメールにてご連絡いただければ幸である。

2 機能

- `\cite` をマークアップした位置に参照文献名を表示する。参照がはじめてなされた文献である場合、`\bibitem` で定義した内容を入力する。
- 文献参照が直前のものと同じ場合、文献名として `ibid.` 出力を行う。`ibid.` 出力とは、`\cite` をマークアップした位置に、言語に応じた “*ibid.*” 相当文言を入力することを示す。
- パッケージオプションに `opcit` が指定されていると、文献参照が二回目以降かつ直前とは異なる文献参照である場合、文献名として `op. cit.` 出力を行う。`op. cit.` 出力とは、`\cite` をマークアップした位置に、著者名と、言語に応じた “*op. cit.*” 相当文言とを入力することを示す。
- “*ibid.*” 及び “*op. cit.*” の相当文言は `\cite` 発行時点の Babel 言語に基づいて選択される。「ドイツ語」，「ロシア語」，「日本語」，「その他」の 4 種類が定義されている。
- `\cite[#1]{#2}` の第一引数（参照頁等の付加情報）を文献名の後にカンマで区切って出力する。（標準 L^AT_EX と同じ）

3 使い方

3.1 プリアンプル指定

以下のとおり.

```
\documentclass[a4paper]{jarticle}
\usepackage[german,english,russian,nippon]{babel}
\usepackage[<オプション>]{citare}
```

Babel パッケージが指定されていると, Babel 言語に応じた略語を出力する. Babel パッケージは `citare.sty` の前に指定しておく. 例では日本語として `nippon` を指定している. 日本語言語定義 `nippon.ldf` を本パッケージに添付している. 稲垣氏配布の日本語言語パッケージである `japanese.ldf` でも動作するようになっている.

Babel 日本語言語パッケージの指定がないと, 日本語文献の参照であっても, 標準では「その他」の言語として扱われる.

3.2 パッケージオプション

パッケージオプションとして `opcit`, `authorrm` 及び `jpdefault` が指定できる.

`opcit`

`op. cit.` 出力をオンにする.

`authorrm`

`op. cit.` 出力の際, 著者名の書体を Roman (立体) にする.

`jpdefault`

`ibid.`, `op. cit.` 出力をすべて日本語文言とする. Babel 言語に依存せず, それぞれ「同書」, 「前掲書」と出力する.

3.3 文献参照

3.3.1 著者名のマークアップ

`op. cit.` 出力をオンにしたとき, 二回目以降の文献参照では `op. cit.` の前に著者名を出力する. このために, `thebibliography` 環境において `\bibitem` 命令で参考文献を記述する際, 著者名を `\bibauthor{<著者名>}` 命令でマークアップしておく.

```
\begin{thebibliography}{99}
\bibitem[lotman1]{%
  {\selectlanguage{russian}%
  \textit{\bibauthor{Lotman YU. M.}}~
  Roman A. S. Puxkina <Evgenii O Onegin>.
  Kommentarii0. Posobie dlya uqitelya.
```

```

Izдание vtoroe.~
L. <Prosvewenie>, 1983.}
...
\end{thebibliography}

```

`\bibauthor{<著者名>}` 命令の `<著者名>` にはコントロールシーケンスや半角カンマ (“,”) が含まれていてはならない。複数の著者を記述するためにカンマが必要な場合は `{,}` のように中括弧で囲んで指定する。

本パッケージは BibTeX には対応していない。thebibliography 環境で文献を記述することが前提となっている。

3.3.2 `\cite` 命令

本文において `\cite` 命令によって文献参照を行う。例えば `\cite[S.~21]{lotman1}` のように記述する。ここで標準 LaTeX `\cite` 命令とは異なり、複数の文献を指定できないことに留意いただきたい。

脚注に文献名を表示したいのならば、`\footnote` 命令と組合わせて使用する。ロシア語による例を示す。出力は図 1 (4 頁) のとおりである。

【入力例 1】

```

\selectlanguage{russian}
Puxkinskaya traktovka bolee bytovaya: niqego vne obydennoi0 realp1nosti
v syuzhet ne vvodit\~sya --- i folp1kloristiki bolee toqnaya:
gadanie <na zerkalo> u Puxkina
prois{\textcompwordmark}hodit v bane, a ne v svetlice,
kak ono i dolzhno bytp1.
\footnote{\cite[S.~268]{lotman1}}%

Takim obrazom, puxkinsikoe <podobie togo-sego> moglo vosprinimatp1sya
kak ironiqeskaya ot\~sylka k literaturnomu xtampu
<xampanskoe --- molodosti>.
\footnote{\cite[S.~253]{lotman1}}%

Princip protivoreqii0 proyavlyaet\~sya na protyazheniya vsego romana
i na samyh razliqnyh strukturnyh urovnyah.
\footnote{\cite[S.~30]{lotman2}}%

Ne pridavaya eitomu vyskazyvaniyu slixkom bukvalp1nogo znaqeniya,
sleduet vse zhe podqerknutp1 ego principialp1nuyu vazhnostp1.
\footnote{\cite[S.~18]{lotman1}}%

```

`\cite` 命令発行時点の Babel 言語環境に応じて “*ibid.*”, “*op. cit.*” の文言を選択するようになっている。ドイツ語、ロシア語、日本語以外は「その他」として扱われる。イタリア語、フランス語、英語などでは「その他」として “*ibid.*”, “*op. cit.*” が出力される。入力例と出力 (図 2, 5 頁) を示す。

Пушкинская трактовка более бытовая: ничего вне обыденной реальности в сюжет не вводится — и фольклористики более точная: гадание «на зеркало» у Пушкина происходит в бане, а не в светлице, как оно и должно быть.¹

Таким образом, пушкинское «подобие того-сего» могло восприниматься как ироническая отсылка к литературному штампу «шампанское — молодости».²

Принцип противоречий проявляется на протяжении всего романа и на самых различных структурных уровнях.³

Не придавая этому высказыванию слишком буквального значения, следует все же подчеркнуть его принципиальную важность.⁴

¹ *Лотман Ю. М.* Роман А. С. Пушкина «Евгений Онегин». Комментарий. Пособие для учителя. Издание второе. Л. «Просвещение», 1983.

² Там же, С. 253

³ *Лотман Ю. М.* Роман в стихах Пушкина «Евгений Онегин». Спецкурс. Вводные лекции в изучение текста. Тарту, 1975., С. 30

⁴ *Лотман Ю. М.*, Цит. соч., С. 18

図1 ロシア語出力例

【入力例 2】

```
\setcitface{roman}%
\selectlanguage{german}
  1. Curtius: Germany \footnote{\cite[S.~10]{curtius}}\par%
  2. Curtius: Germany \footnote{\cite[S.~20]{curtius}}\par%
\selectlanguage{italian}
  3. Praz: Italian \footnote{\cite[p.~30]{praz}}\par%
  4. Praz: Italian \footnote{\cite[p.~40]{praz}}\par%
\selectlanguage{nippon}
  5. Jakobson: 日本語 \footnote{\cite[~50--9 頁]{jakobson}}\par%
  6. Jakobson: 日本語 \footnote{\cite[~60 頁]{jakobson}}\par%
\selectlanguage{german}
  7. Curtius: Germany \footnote{\cite[S.~70--2]{curtius}}\par%
\selectlanguage{italian}
  8. Praz: Italian \footnote{\cite[pp.~80--9]{praz}}\par%
\selectlanguage{nippon}
  9. Jakobson: 日本語 \footnote{\cite[~90 頁]{jakobson}}%
```

3.3.3 \setcitface 命令

スラヴ文献学での文献名の引用は、著者名を斜体、書名を立体で表現するが多い。一方西欧の学術書では著者名を立体、書名を斜体とするのが一般的ではないだろうか。本パッケージでは作者の必要性から、

1. Curtius: Germany ¹
2. Curtius: Germany ²
3. Praz: Italian ³
4. Praz: Italian ⁴
5. Jakobson: 日本語 ⁵
6. Jakobson: 日本語 ⁶
7. Curtius: Germany ⁷
8. Praz: Italian ⁸
9. Jakobson: 日本語 ⁹

¹ Curtius E. R. *Europäische Literatur und lateinisches Mittelalter*, Bern: Francke, ²1954.

² ebd., S. 20

³ Praz M. *La carne, la morte e il diavolo nella letteratura romantica*, Firenze: Sansoni, 1966.

⁴ *ibid.*, p. 40

⁵ ロマーン・ヤーコブソン, 川本他訳 『一般言語学』, みすず書房, 東京, 1973., 50–9 頁

⁶ 同書, 60 頁

⁷ Curtius E. R., a.a.O., S. 70–2

⁸ Praz M., *op. cit.*, pp. 80–9

⁹ ロマーン・ヤーコブソン, 川本他訳, 前掲書, 90 頁

図2 言語出力例

op. cit. 出力にける著者名は標準では斜体としている。

西欧の文献引用の習いに合わせ著者名を立体で出力するには, `authorrm` オプションを指定するか, `\cite` 命令に先立って `\setcitface{roman}` 命令を発行する。本命令の引数に `roman` 以外を指定すると斜体に変更する。

3.3.4 略語の言語設定

“*ibid.*”, “*op. cit.*” の略語の言語毎の標準設定値は表 1 (6 頁) のとおりである。ユーザでカスタマイズする場合, マクロを `\def` ないし `\renewcommand` 命令によって再定義する。例えば, ロシア語の op. cit. 出力を “Указ. соч.” に変更するには `\def\ukazan{Ukaz. \, ,soq.}` を適当なところに指定する。

3.3.5 opcit オプション指定時の注意事項

op. cit. 出力, すなわち “著者名, *op. cit.*, 付加文字列” 形式の文献参照は, 同一著者の複数の文献を引用しているような場合, 混乱を招く可能性がある。このため `citare.sty` では標準では op. cit. 出力を行わず, `opcit` オプションを指定したときにはじめて op. cit. 出力を行うようになっている。opcit オプションがない場合, 同一文献引用が直前のものと同じとき *ibid.* 出力を行うが, それ以外は文献名が出力される。op. cit. 出力の際は, `\cite[付加文字列]{文献キー}` の第一引数 (付加文字列) によって, 参照頁などとともに文献が特定できる情報を与えることをお勧めする。例えば, `\cite[1983, S~256]{lotman1}` のように指定し, 頁とともに刊行年を付加するような工夫があるとよいかもしれない。この例は, “Лотман Ю. М., Цит. соч., 1983, С. 256” と出力される。

表 1 略語一覧

区分	言語	Babel 選択言語	出力標準値	マクロ名
<i>ibid.</i>	ドイツ語	german	ebd.	\ebd
	ロシア語	russian	Там же	\tamzhe
	日本語	nippon, japanese	同書	\dousho
	その他	english, etc.	<i>ibid.</i>	\ibid
<i>op. cit.</i>	ドイツ語	german	a.a.O.	\aao
	ロシア語	russian	Цит. соч.	\ukazan
	日本語	nippon, japanese	前掲書	\zenkeisho
	その他	english, etc.	<i>op. cit.</i>	\opcit

3.3.6 略語の統一

`citare.sty` では選択された Babel 言語に応じて “*ibid.*”, “*op. cit.*” の略語を出力する。日本の学術論文ではこのように引用文献の言語に合わせた略語を用いることが多いのに対し、欧米では自国語の略語で一貫させることが一般的のようである。 `jpdefault` オプションを使用するとすべて日本語で統一することができる。これに際し、略語を「同書」、「前掲書」ではなくドイツ語の “*ebd.*”, “*a.a.O.*” で出力したい場合は日本語のマクロ定義を、文書の開始時点で以下のように変更しておけばよい。

```
\renewcommand{\dousho}{ebd.}
\renewcommand{\zenkeisho}{a.a.O.}
```

3.3.7 \citbsize 値

`\cite[S~6]{lotman1}` のように第一引数を指定すると書名のあとにコンマで区切ってその内容が出力される。この際、カンマの前で改行されてしまう場合があり、`\citbsize` 値をデフォルト 0em より小さく設定することで回避できる場合がある。`\setlength` 命令で負値をセットする。設定値の再変更はできない。

例文用文献

- [1] *Лотман Ю. М.* Роман А. С. Пушкина «Евгений Онегин». Комментарий. Пособие для учителя. Издание второе. Л. «Просвещение», 1983.
- [2] *Лотман Ю. М.* Роман в стихах Пушкина «Евгений Онегин». Спецкурс. Вводные лекции в изучение текста. Тарту, 1975.
- [3] Curtius E. R. *Europäische Literatur und lateinisches Mittelalter*, Bern: Francke, ²1954.
- [4] Praz M. *La carne, la morte e il diavolo nella letteratura romantica*, Firenze: Sansoni, 1966.
- [5] ロマーン・ヤーコブソン, 川本他訳 『一般言語学』, みすず書房, 東京, 1973.

以上

Copyright © 2006, *isao yasuda*, All Rights Reserved.